異文化とアイデンティティ
――『クララの日記』から――

福田　須美子

はじめに

日本初の女子留学生である津田梅子等がアメリカ生活にとけ込み始めた頃、入れ代わり、アメリカから日本へやって来た少女がいた。クララ・ホイットニー（一八六〇―一九三六）である。一八七五（明治八）年八月三日、クララはその家族とともに来日した。この経緯は駐米弁務使森有礼[1]の計らいによるものであった。森は、これからは日本においても欧米式の商法が必要であると考え、商業を専門に教える学校の設立をもくろんでいた。「明治七年頃、当時米国にあつた森有礼氏から、時の東京府知事大久保一翁氏に宛てて、米国における実業教育の盛んである事は実に想像以上であるが、日本にも是非同様のビジネス・スクールを建てたいと思ふから、何分の助力をお願ひ致したいと頼んで来た[2]」という。この設立案は紆余曲折を経、府では財政難ということで東京会議所に図った。会頭の渋沢栄一の働きかけにより、ここからの補助金と森の私財を投じ、私立学校としてなんとか京橋の尾張町に商法講習所開設の運びとなったのであるが、森は計画の段階で、滞米時ニュージャージーのニューアークで実業学校（Bryant, Stratton & Whitney Business College）を開いていた、クララの父ウィリ

アム・コグスウェル・ホイットニー[3]にその所長を依頼したものと思われる。学校経営に行き詰まっていたクララの父は、この「お雇い」の話に乗ることになる。敬虔なクリスチャンであったクララの母アンナも日本での伝道を志し、一家は遥か日本「大君の都」へ旅立つことになったのである。

一　「日出づる国」へ　旅立ち

一八七五（明治八）年八月三日。

いよいよ日本に着いた。……景色のすばらしさは格別で、起伏する丘が重なり合い、実に鮮やかな緑におおわれていた。

好奇心旺盛で、感受性豊かな少女クララはこの時十四歳、十五歳の誕生日を目前にしての来日であった。「そよ風の島」という第一印象で幕開けした日本滞在記。母アンナの日本に対する積極的な態度も影響しているのだろう。また時は十九世紀末のジャポニズムの時代でもあった。クララは見ること聞くことすべてに興味津々なのである。

「日出づる国は本当に美しく」、期待に胸躍らせた新生活の始まり。だが、行く手はにわかに掻き曇る。

森有礼と父親との間に交わされた約束に行き違いが生じたのである。ホイットニーは商法講習所の所長にはなれなかった。商法講習所は開設したものの、設立者の森がその年の一一月清国公使を命ぜられて、日本を離れることとなった。かくて、講習所は森の手を離れ東京府の所管に移ったのである。何ということだろう。海の果ての見知らぬ国に来て、誰一人頼ることの出来ないところにまで追い詰められ、一家は困窮の極みに達する。

ここに救世主として現れたのが勝海舟[4]であった。勝はこの年、静岡から東京氷川町に戻っていた。門下の富田鉄之助[5]がアメリカ留学中、父ウィリアム・ホイットニーのカレッジに学び、また母アンナに英語や聖書の手ほどきを受けるなど、世話になったことを知っており、さらにわが国においても商業の近代化が緊要な課題であると判断しての厚意であったと思われる。

先週のある日、すべての望みが失われた時、私たちがこの国で設立するためにやって来た商業学校（商法講習所）への寄付として、勝さんが千ドルを送って下さったのである！　（一八七五・九・五）

生活のため、父は銀行家に授業し、母は聖書や英語を教え、兄ウィリィは算術を、クララは英語と世界史を教え、妹アデレイデも近所の子供にアルファベットを教えている。何人かの使用人を雇っているとはいえ、当時の外国人教師の家としては極くつつましやかに生活が滑り出した。

クララの日記は、来日の一八七五年八月三日―一八七八年七月一八日（上）、兄の医学勉学のため一旦帰米、のち再来日し、一八七八年七月一九日―一八八七年四月一七日（下・途中一八八四年一一月一二日の日記のあと一八八七年四月一七日まで空白）の日本滞在中の生活を生き生きと物語っている。

この十四歳から二十六歳までのあしかけ十三年の間に、クララは、父を失い、続いて最愛の母を失い、その後勝海舟の三男梅太郎と結婚する。この間、大きい目を見開き、鋭い観察眼で、日本の風物、人物、人間関係、そしてその機微を活写している、実に率直に。自分の姿を見つめながら。

本稿ではクララの青年期にスポットを当て、少女から大人の女性への成熟の過程で、クララが徐々に日本の地に根をおろしてゆく様、これをアイデンティティ形成の過程として追跡してみようと思う。

二　言葉と異文化

岸に近づくにつれ、たくさんの漁船が見えて来たが、それに乗っている人々は素裸だった〈ショッキングだ！〉（七五・八・三　十四歳十一ヵ月）

裸は野蛮、クララの目には「どの眺望も快く、堕落しているのは人間のみ」と映った日本の国でスタートした生活。だが、町を歩いてみると、

本当に、在日外人の状態はひどいものである。この国に来ている若い人たちは不行跡で、堕落していて、おとなしい日本人を何かにつけ侮辱しているのだ。既婚の商人たちは、この国の女の人たちをめかけとして家に置いている。水夫たちはもっとひどい。かわいそうに半分捨てられた小さな子供たちが、日本人には不潔だとみなされ、父親にも構われず、ほったらかされてうろついているのを見ると、痛ましい限りである。そして、この国の人たちは、外国人というのは皆そん

なものだと思っているのだ。宣教師たちは最良だが、それでも大部分はきれいな家に住み、召使いを多く使って、馬や馬車を持ち、本国の熱心な信者たちが描く宣教師の生活とはおよそ掛け離れたぜいたくな暮しをしている。ああ、この人たちには何かが必要なのだ。役に立つか、効き目のあるものは聖霊しかない。私の魂は、嫌悪の念をもって、これら堕落した外国人〈私の祖国の人も幾人か含まれているのだが〉に背き、日本人の中に見出される純粋なものの方にひかれてゆく。（七五・九・二四　十五歳）

目に余る外国人の行動に憤り、また、「素朴」な日本人の「親切」に接して、「堕落した」日本人のイメージは回復してゆく。

日本での生活はますます面白くなってくるので、しばらくしたら、きっとこの美しい島が祖国のように好きになり、離れるのが残念になるのだろう。（七五・一〇・五　十五歳一ヵ月）

日本人にひかれ、日本の文化に親しみを持つようになったとはいっても、まだまだこの頃はあくまでもアメリカ人――先進国の高見から日本を眺め、その文化に接していた。特に同性である日本の女たちの生活のありようには、厳しいまなざしが向けられている。

ああ何ということか！　女の人たちには精神がない、本が読めない、子供たちを教えることが出来ない。母親は最初の教育者であるのに、その母親が無智で学問を軽蔑し、顔に化粧して口紅を塗ることにしか関心がないのだったら、子供はどうやって正しい考えをその若い心に植えつけられるのであろうか。（七五・一一・二六　十五歳二ヵ月）

時は維新間もない頃。一八七二（明治五）年に「学制」が布かれ、学校教育がスタートしたばかりのことである。真っ白い顔の真ん中の真っ赤な口紅にクララは強烈な印象を持ったようである。お化粧する時間はあっても、読んだり、書いたりすることはおろか意志を発することも決してしない女たち。少なくとも来日間もない彼女の目にはそう映った。こんな社会にいたら、

私は実際、若い人たちの社会から閉め出され、異国の人の中で青春の日々を浪費し、旧式な人間になってゆくような気がする。（七五・一二・二　十五歳三ヵ月）

だが言葉が自由になれば、こうした日本の女たちとも交

流でき、日本の生活を楽しむことが出来るにちがいない。この国の言葉の「音楽的な」響き。とはいえ、日本語は難しい。

日本には階級ごとに、きまった言葉、つまり、大名、サムライ、富裕な商人、中小の商人、職人職工、労働者、人力車の車夫等々に、それぞれの慣用語があるのだそうだ。……こんな難しいものにアタックする前に、自分自身の言葉にもっと完全に精通した方がいいのではないかと、本気で考えている。（七五・一二・二　十五歳三ヵ月）

とはいえ言葉が少しでも使えるようになると勉強にも弾みがつく。

色々の店で、自分たちの日本語を試しながら、あちこち回って帰宅した。わずかな日本語で何とかやっていけるのは不思議だ。（七六・三・二　十五歳六ヵ月）

話し言葉の方は、買い物や、日曜学校、聖書の授業、英語のレッスン、ピアノ教授、パーティ、彼女の組織したお裁縫の会でのやりとり、それに子どもたちとのゲームを通じて、めきめき上達した。羽根つき、福わらい、雪合戦、影絵、なぞなぞなどゲームは得意、大好きだ。

クララは耳がよく、さらに人の話しぶりをよく観察している。日に日に単語がふえる楽しみ。日本に来てから、この八月でほぼ二年、日本語に多少自信が持てるようになった。

自分の知っている日本語を使うのは好きだ。事実、日本語が出来ることが自慢になって来ているのではないかと思う。（七七・六・二三　十六歳九ヵ月）

クララのように日本人と日常的な付き合いをしている者と、閉鎖的な外人社会で暮らしている者とでは、日本語の出来や日本人を見る目に差が生じるのは言うまでもない。

バテェルダー氏はぶどうについて話をしようとなさったが、長年この国におられるのに、日本語でも最悪の言葉を少ししか話すことがお出来にならない。日本人のような礼儀正しい国民の中にそんなに長くおられるのだから、日本人の優雅さを少しは見習うべきだと思う。とてもひどい振舞いをされるので、私は役人たちにあやまらねばならなかった。今まで外人と日本人を比べて考えたことがなかったが、確かに我々は身体的に、そして多分知的にもまさっている。——しかし東洋人は、少なくとも人前で取るべき態度をちゃんと

心得ている。（七七・八・二二　十六歳十一ヵ月）

ホイットニー一家は来日早々困難を抱えることになったのであるが、それによりかえって多くの日本人の知己を得た。「森さん以外の日本人は皆親切だ」（七五・九・三〇）とか、「日本人と知り合いになってから随分楽しい思いをし、日本人がますます好きになってきて、気持ちのよい毎日を過ごしている」（七五・一〇・一一）とあるように、多くの日本の友人たちから援助の手や、招待を受けている。クララは母親とともに、日本の風物、骨董、美術、建物、芸能、歌舞音曲等に興味を抱いていた。折しも西欧、アメリカにおいての日本ブーム。

中食後に、杉田（武）家に出掛けた……向こうの人々について沢山面白い話をなさった。今、アメリカでは日本ブームで、あちこちから質問攻めに合われたようだ。（七七・八・二一　十六歳十一ヵ月）

一八七七年八月の博覧会には、込み合う日本人に混ざって、多くの外国人が入場した。この時クララは日本の美術を中心に見て回っている。

午後日本博覧会へ行った。思ったほど大きくはなかったが、なかなかすばらしいものである。……一番ひきつけられたのは美術館だったが、日本人にもそうだったらしく、人が一杯で、ゆるやかな着物に扇子を拡げ、自分自身が彫像のように立って、見とれている人もいた。私もその美しさの前を離れるのはつらかった。（七七・八・二三　同）

「親切な」日本の友人に招かれ、お正月、雛祭り、豆まき、端午の節句、七夕等の伝統的行事に参加し、そのお返しにディナーパーティや、クリスマス・パーティ、西洋料理や洋裁の講習会等を催すこともあった。こういう機会に若者は親しく交際しなければ。

いよいよクリスマス……お客がどっとやってきた。……父は、若い紳士たちが淑女たちに紹介されるべきだ、と気をもんでいたが、一座の誰にもそうさせることは出来なかった。日本ではアメリカと違って、淑女と紳士が社交界で交際することは作法にかなわないのだ。……しかし、今日のパーティは日本の女性にとって新時代の夜明けである。女子が紳士と同じテーブルにつき、今までのように女子がするのではなく、紳士たちに礼儀正しくサービスされるのだから。私たちの、この日本で最初のクリスマスのパーティが何かいい事

のきっかけになって欲しい。（七五・一二・二五　十五歳三ヵ月）

日本の男女は、一緒にいても言葉を交わすことはおろか、特に娘たちはじっと黙して語らず、動こうともしないのであった。

十一歳のその令嬢は、赤ん坊のように、体を洗ってもらい、着物を着せてもらい、そして遊んでもらうのだ。厚くお化粧をし紅をさしておられるが、その丸顔には表情といったものが全くない。いろいろのものに目をやりながらも、人形のように一言も口をおききにならない。

大名の家の婦人たちは、書物を読んだり、精神を陶冶したりすることは、何にもしないのだ。ああ、私は大名の令嬢に生まれなくて本当によかった。日本の甘やかされた、何にも知らない貴族の令嬢より、自由で幸福な、なつかしいアメリカの質素な田舎家の娘である方がましだ。うらやましいどころか、私は自分の将来性を考えると、この幸せな運命にますます満足してくる。こういう令嬢たちはある青年と婚約して、従者と時折の訪問者のほかは、社交界で人と交わることもないのだ。無邪気にゲームをしたり、笑ったりする少年少女の陽気な集まり――そこでは、男の子は大人になるまで男の子で、女の子は成長して品位を持つようになるまで女の子でいられる、そんな集まりとは何と掛け離れたものだろう。このような日本の狭量な女の人たちが交わり合って、アメリカ社会の楽しい自由を見ることが出来たら、どんなにいいだろうとよく思う。両性の社交的な集まり、そこでは騎士道精神が女性に示され、女性の意見が男性のと同様に重んじられるのだ。しかし、もし彼らがそのようなことを経験したとしたら、きっといやでたまらなくなり、日本的に引きこもって召使いに崇拝されていた方がましだと思うことだろう。（七六・二・一六　十五歳五ヵ月）

表情のない人形のような少女たち。自由に交わり、ゲームをしたり、おしゃべりしたりする社交の場がないせいだけだろうか。

アメリカの少女たちは、すべての点で対等に男性と交際していて、男性の人格を見抜く目を持っているから、自分で選ぶことが出来るのだ。私はアメリカ人に生まれたことを心からありがたいと思う。キリスト教

の上に築かれた栄光あるわが国よ、万歳！（七六・八・二四　十五歳十一ヵ月）

クララは、アメリカ人としてのプライドを堅持しつつ、クララ自身のやり方で日本の文化に積極的にかかわり、日本の生活を楽しんだ。並行して、もちろん外国人同士のおつきあいも大事にしている。教会やＹＭＣＡでの交流、読書クラブ、金曜奉仕クラブ、アジア婦人協会での活動にも率先して参加し、同じ年頃の娘たちのリーダー的存在でもあった。

『東の星』という新聞を出して、詩や小説や政治評論を発表するということになっているが、言い出し兵衛の私が編集者になることも全員賛成で決定した。……私は編集者、書記、執筆者の三役を兼ねるが私には願ってもないことである。（七八・四・一一　十七歳七ヵ月）

「輝かしい『東の星』は本日めでたく『日出づる国』にその姿を現わした」（同四・三〇）と同じ月の日記にあり、新聞の形態はともあれ、その推進力には驚かされる。日本に来た当初は、「私は結局教師という職業を選ぶのが合うような気がする」（七六・二・一七）と思っていたクララではあったが、この頃は将来を文学の方面でと思い始め、精力的に活動を開始している。

私の進路ははっきりしているように思われる。私は文学以外のものはすぐに退屈してしまうが、文学だけはますます魅力を感じる。文学は私に人生に対して高尚な目的を持たせてくれ、他のものはすべてつまらなく見えてくる。（七八・五・二四　十七歳八ヵ月）

一方で、同じ年頃の日本の娘たちがやっている芸事にも強い関心を示した。茶の湯、生け花などもただ観るだけではなく、機会があれば必ずやってみる。また浅草見物、隅田川の川開き、花火、上野の花見、菖蒲や菊祭り、江ノ島、箱根、日光等名所旧跡などにも誘われれば嬉々として出掛ける。人が和歌を詠めば自分も見よう見まねで作ってみる。

風吹けば桜は散りて消えゆけど
神は絶えせず世を治めたまふ

（七八・四・二〇　十七歳七ヵ月）

だが何といっても、クララを日本の生活に引き込んでいったのは、日頃の友達とのたわいない遊びのなかで培われた友情であったと言える。

昨日も今日も私はお逸さんのところへ遊びに行っ

た。お逸さんを訪問するときには戸口に立って、うやうやしく「ゴメンナサイマシ」あるいは「オ頼ミ申シマス」と言って、誰かが中から、お入り下さいと言うのを待つ。……角を曲がった所で紺の着物をお召しになり、手には金粉をつけた漆塗りの文箱を持った勝先生ご自身にばったり出会ったのである。私はこんな所で勝先生に会って気まりが悪くはっとして、深く頭を下げ、「失礼いたしました」と小声で言って、道を開けた。先生はちょっと足を止め、にっこりして、「すっかり日本人におなりですな」と言って通り過ぎて行かれた。(七九・一・一一　十八歳四ヵ月)

来日して三年五ヵ月、勝海舟の三女逸との深い友情に育まれ、早くもクララは「すっかり日本人」となった(?)のである。

三　交流

本書上下二巻、実質六年半の日記に登場する人物名を、巻末の索引により、頻度、付き合いの深さを度外視して数えると、日本人二五三人、外国人二六七人に及ぶ。数多くの著名人が名を連ねているが、ここでは身近な付き合いを通じ、彼女のアイデンティティ形成に影響を与えたと思われる日本人たちとの交わりを取り上げる。彼女が主に交わった日本人のグループには、来日の発端を作った森有礼を初めとする明六社の関係者と、アメリカ時代の父母の教え子である富田鉄之助に繋がる勝海舟家の人々がある。

(一)　森有礼一家

すでに述べたように、森有礼は彼女たちの来日のきっかけを作った人である。早々に父親の仕事が破綻し、ホイットニー一家は窮地に陥る。日記はこの間の恨みつらみから始まるのであるが、災い転じて、この一件により両家の付き合いは否応なく深まっていく。森は、約束が果たせなかったこの一件を遺憾に思って、一家を森所有の家に住まわせるなど、個人的に出来うる限りの助力を惜しまなかった。徐々にわだかまりも解け、当時大家族を抱えていた森家との家族ぐるみの交流が始まる。

今日、森さんのおばあさまから母にお祈りに来て欲しいというお使いが来た。今度は通訳もつけていらっしゃり、ご自分の神様は信じる価値がないから、もっ

といいものが欲しいと言われた。きっと神様は最後におばあさまを救って、御国に入れて下さるおつもりなのだ。（七六・一・一五　十五歳四ヵ月）

クララの母は敬虔なクリスチャンであった。その伝道は自発的な活動であり、信じるものを人に伝えたいという熱意に基づくものであった。彼女に接した人で、その人柄、その言葉、そのふるまいに動かされた者は多い。森有礼の病床の母・里はクララの母を信頼し、キリスト教にすがろうとしている。初期のキリスト教の伝播は、こうした草の根の「民際」に拠るところが大きいと思われる。

一八七八年六月、清国公使として離日していた森夫妻が帰国した。

森婦人が訪ねて来られ、楽しい会話ができた。……永田町にある森家の持家に入らないかという申入れをされた。……家賃としては私が森夫人にピアノをお教えするということであった。……森氏は母に何人かの新しい学生さんをよこして下さるともおっしゃった。（七八・六・一一　十七歳九ヵ月）

早速森夫人のピアノレッスンを始めることになる。クララの母も森夫人とは仲良しだ。誕生日につつじの花を贈ってもらい、それ以来つつじが大好きになったお母さん。クララの母は森夫人の洋装顧問でもあり、お互い助け合って行き来している。パーティの多い森夫人の強い味方である。

今夕森さんのご招待で、永田町の竣工したばかりの新しい邸宅で、グラント将軍夫妻にお目にかかった。……（この時、有栖川宮妃殿下に）森さんは私を紹介して下さって「ホイットニー嬢でございます。長いこと宅にすんでおりました。親友でございます。どうぞ御心安らかに、妃殿下、この人は上手に、日本語が話せます。どうぞお話し遊ばして下さいませ」。私は丁寧におじぎをし、妃殿下のご機嫌を伺い、初めてお目にかかりますと言った。妃殿下は……私の日本語の知識をほめて、私が何年日本にいるかなど訊かれた。（七九・八・二八　十八歳十一ヵ月）

日本の生活に彩りを与えてくれた森夫妻であったが、またも突然一八七九年一一月、森夫妻は英国公使として旅立つことになる。

森氏は英国公使に任じられ、二週間後には出発なさるので、大好きな奥様にも会えなくなる。ロンドンの私たちの公使館に三ヵ月位遊びに来て下さいと奥様は

おっしゃり、着いたら手紙を書いて、女王様からどんな歓迎を受けたかすっかり教えて下さると約束なさった。（七九・一一・八　十九歳二ヵ月）

一八八〇年四月、一時帰米する途中、クララたちはロンドンで夫妻に会っている。その英国での任期を終え、八四年四月夫妻は帰国した。この時には、もはやクララの母はなく、天皇招待の園遊会での淋しい再会となった。

今日始めて日本の天皇様にお目にかかった。天皇陛下が外交団と日本の華族の方々をお浜御殿に観桜と昼食に招待された。……イギリスから帰国されたばかりの森夫人とも楽しいおしゃべりをした。彼女は昔とちっとも変わらず美しい。輝く目に涙を浮かべ、深い感情を込めた声で母の事を話された。（八四・四・二五　二十三歳七ヵ月）

苦難の折、またグラント将軍歓迎パーティなどの華やいだ席でやさしく手を差し延べてくれた森夫人・常は、その後間もなく不貞の咎を受け、離縁となり、気がふれて死んだという。クララにとっては日本女性の細やかな気配りと優雅さを教えてくれた人であった。

（二）福沢諭吉[6]

明六社の社友でもあり、勝海舟率いる咸臨丸で太平洋を渡った経験を持つ福沢諭吉は、ホイットニー家の苦境を聞き及び、支援を申し出た。

福沢家に着くと、皆さんとても親切で礼儀正しいので、私はすっかり嬉しくなった。福沢さんは二階に案内して、江戸湾の素晴らしい眺めを見せて下さった。その後七歳のお嬢さんが日本のハープ（琴）をお弾きになった。私には何だかピアノの調律をしているように聞こえたが、富田さんの奥様（筆者註・富田鉄之助の妻・縫）はとてもいい音楽だと言われた。（七五・一一・一六　十五歳二ヵ月）

もてなしの琴の音がピアノの調律に思われたところが面白い。文化の「不協和音」。音合わせの方は不調だったようだが、この出会いから、クララは福沢諭吉の紳士ぶりに一目置くようになる。

帰途私は福沢家（福沢諭吉）に寄って、奥様を火曜日の夕食にお招きした。福沢氏がご在宅で上がっていくようにしきりにおっしゃった。私は靴がまだ泥んこ

だったので、靴を脱いで上がった。福沢氏はとてもご親切で、お嬢さんのお琴の練習を聞きに連れていって下さり、日本料理の昼食をご馳走になった。福沢氏のお家は日本建築だが埃一つなくきれいである。いつも私に親切にして下さるので私は先生を尊敬している。強い男らしい方で、いろんな有益な本を日本語に訳しておられる。先生の学校（慶応義塾）は弁論で有名である。また非常にリベラルな考えの持ち主である。（七八・二・一六　十七歳五ヵ月）

クララによれば、福沢は、清潔で、男らしく、リベラルな紳士として描かれている。福沢諭吉はお世辞や冗談も得意だったらしい。これも彼の「弁論術」の一環なのであろうか。

福沢先生のところへアルバムに書いていただくために行った。彼は上機嫌で部屋に入って来られるなり、あらゆるお世辞を一気に並べたてられた。私の願いに対し、意地悪をして、字は書けないのだと言われた。「この辺に字の上手な人ならいっぱいいますよ。誰か呼んできましょう」と言われたが、私は先生の書がほしいのだと言った。そうしたら、何か印刷して上げると言われるので、そうじゃない、書いてほしいのだと言った。それでやっと笑いながら降参されたが、ほんとうに困り果てたという様子で、どうしても書けないと言われた。有名な大先生も、ほんとうに困っておられた。（七八・四・四　十七歳七ヵ月）

「有名な大先生」も書の方は苦手だったらしい。この短いやりとりの中に、先生の困った顔が浮かんで来るようである。クララは先生の弱みを見つけ、一層親しみを持った。

私は福沢氏のところへ行った。彼が在宅だったのは幸いだった。私は彼とゆっくり話をしたくなる。私が男の子だったら、彼を教師として誇らしく思ったであろうがそれは不可能だ。彼には哲学的閃きがあって、へたな百科辞典よりも役に立つ。私のアルバムに彼は「我々は文明の中に光を見いだすことはできない。文明国の中に文明を見いだすことができない」と書かれた。……私達は政治的な議論をしたが、その中で、日本人の一番良い特徴が論じられた。（七八・七・一二　十七歳十ヵ月）

この頃から福沢諭吉は物質主義の近代文明に対して懐疑的になっている。

福沢先生は英語と日本語をやたらに混ぜて奇妙な話し方をなさるので何を言っておられるのか分かりにくい。例えば知事の話で「ミスター桐山イズほんとにカインドマンだけれども、ヒイイズ大層ビジイ、この節、イエス」といった具合である。（七九・一・七　十八歳四ヵ月）

先生のジャパニーズ・イングリッシュには閉口したクララではあったが、グラント将軍歓迎会の折、

こわごわしたハカマで威儀を正した背の高い男らしい福沢（諭吉）さんはまわりの背の低い人々の上にそびえていた。こちらを見て嬉しそうな様子で、低い会釈をし、低い声で歓迎の言葉をつぶやかれた。この日出席した紳士方で日本服は福沢さんだけだった。しかし、立派な着物を召された姿は、体に合わない洋服を着て身のこなしのまずい他の紳士達より立派に見えた。福沢さんは思想上完全な革命を遂げられた。というのは、洋式の家、洋式の生活様式を捨てられたばかりでなく、もう洋服は召されないし、私達のような挨拶の仕方もなさらない。しかしあの方は今迄通りの方で、東京の三著名教師（福沢諭吉・中村正直・津田仙）の中で、一番好きな人である。彼は熊だけれども、やさしい熊である。（七九・八・二八　十八歳十一ヵ月）

いち早く西洋文明を紹介し、その後のちぐはぐな文明化に落胆、その限界に気づいた福沢は、日常生活においてもいち早く欧化のスタイルを捨て去った。徐々に日本固有の美に目覚めつつあったクララは、その福沢の姿勢に敬意を表した。

ところが一転して、

福沢家の人々がクリスマスのデコレーションを見に三田からやってこられた。子供さんたちがきわめて行儀が悪く粗野で、その行動があまりにも私をいらだたせたので、彼らには少しも構わないことにして、ただ彼らや福沢氏にお辞儀をしただけだった。福沢氏は、父にお別れにこられなかった言い訳を、くどくど述べはじめられたが……私はお辞儀をしただけで一言も答えずさっと部屋から出てしまった。福沢氏は驚かれたと思うが、彼は、父に対して、大変失礼な仕打ちをされたのだ。（七九・一二・二八　十九歳三ヵ月）

傷心の父親が帰国する際、お別れの挨拶がなかったことに腹を立て、ここでは無礼者だと決めつけている。青年期

の純粋な気持ちを傷つけたのだろう。

(三) 津田仙[7]

やはり明六社の社員であり、農園や農業学校、学農社の経営、『農業雑誌』の発行と多忙を極めた津田仙も、ホイットニー家の支援に駆けつけた一人である。

今日、津田さん(津田仙・学農社校長)が、お庭にいちごを摘みに来るよう招待して下さった。……一時半に私たち、つまり母と富田さんの奥様とアディと私は出発した。風が吹いて埃っぽく、あまり気持のよい日ではなかったが、間もなく目的地(麻布本村町二一七学農社)に着き、津田さんがお庭に出て私たちを迎えて下さった。とてもお喜びになったご様子で、英国風の家に招き入れて下さった。……池を渡り、丘に上ると、そこから見える四方八方みな津田さんの所有地だった。津田さんは〈クリスチャンなので〉敷地に教会と、大きな校舎を建てている。大きな男子の農業学校を経営していて、すべてご自分の費用で維持しておられる。このことは本当にお国のためになることだ。ミカドが先日津田さんをお訪ねになり、国に対する奉仕をおほめになった。(七六・五・二四　十五歳八ヵ月)

西洋野菜を開発している津田さんはその料理法の開発にも熱心だ。進取の気性に富み、まめに動く人である。

土曜日、津田さんと、杉田さんの奥様がディナーにいらっしゃった。アスパラガスやその他の野菜の料理法や、いちごショートケーキや、いろいろなものの作り方を知りたいとおっしゃるので母が二人を台所へ連れて行き、料理してみせると、二人は立って眺めながら、ノートと鉛筆を持って、母のすることすべてを細かく書き記した。又お弟子さんがふえた――ただしちょっと変わった方面で――。(七六・六・六　十五歳九ヵ月)

お人好しの津田さんは気さくで話好きである。洋装の不便について面白おかしく学生たちと話している。

津田氏はひどく謹厳でいらっしゃるかと思うと急に陽気になられる。「文明に触れる前はシャツを着ないで風邪を引かなかったが、今ではシャツを着ないと風邪を引く。昔は靴でなく、下駄を履いていたが、今では下駄を履くと転んでしまう。昔は帽子をかぶらなかったが、今では帽子を忘れると頭痛がする。これが進

歩なのでしょうが私には不便なことです」と彼は話された。すると一人の学生さんが「先生、それはちがいますよ。帽子をかぶられないと頭痛がするのは進歩のせいではなく先生は髪の毛がおありにならないからですよ」と言ったのでみんな大笑いだった。（七九・三・三〇　十八歳六ヵ月）

先生をからかう学生たち。津田校長は陽気である。先生はキリスト者としても海岸女学校や盲学校の設立など広範な活動をしている。

日本は今文明開化を行っているが、必要なのは文明だけではない。人はパンのみにて生くるものにあらず、水も必要だが、飲水だけでも生きられない。同様に、文明のみで日本は完全になれない。破滅を避けるにはそれと同時に信仰が必要なのだ。（七九・四・六　十八歳七ヵ月）

文明社会では、物質だけではなく心の豊かさも大事だと津田は考えた。これを宗教に託したのである。さらにキリスト教は生きる喜びを教える宗教であると説いた。

英語礼拝が終わると、津田氏が日本語で話をした。「イエスの教えは喜びの宗教です。賛美歌も聖書も、楽しいとか、幸なるかなといった言葉で一杯です。そしてにこにこしながらマタイ伝五章を読まれた。（七九・四・二〇　同）

忙しい毎日のなか、月の一日を割き、津田家では親睦会を持った。礼拝に始まり、楽しいおしゃべりと美味しい食事が用意される。

津田家で月一回の親睦会があったので、今日は昼から出かけた。母は礼拝が終わると直ぐ帰ったが、お逸さんと私は夕飯まで残った。中村（正直）夫人とお嬢さんもいて、楽しくお話をし、津田さんのおいしい苺やアーティチョーク（きくいも）とアスパラガスの煮たのをいただいた。津田さんは色々珍しいものを見せて下さり、帰りに、彼が作らせた扇と、彼がアメリカから持ってきた夜に花の咲く紐サボテンを下さった。津田邸を出たのは八時過ぎで、母はひどく心配していた。（七九・六・七　十八歳九ヵ月）

夢中になると時を忘れ、時間にはルーズなところがあったと見える。次の一こまは彼の風貌を髣髴させる。

村田（一郎）氏が今日私たちを、目黒へピクニックに招待して下さった。……あの美しい菖蒲園（笑花園）

でブラブラしていると、遅刻常習犯が汗に顔を赤くしてやってきた。洋服を着込んできたのだが、スネはズボンのすそから丸見え。チョッキの下の麻のシャツのお腹の部分がとび出し、カラーがちゃんと留めてなかったので横にずれて、蝶ネクタイが左の耳の下にきてしまい、まるでいたずら子猫のような有様だった。ハアハア汗をかきながら、展示してある植物を説明して下さった。（七九・六・一一　同）

朴訥な津田さんは憎めない人でもある。

（四）勝海舟

まずは経済的バックアップから始まった勝の援助は、次第にホイットニー一家の生活全体を支えるものとなっていった。今日は初めて勝さんが訪れる日、刀を持っておいでになった。

勝さんは非常に著名な提督で、今のところ血気にはやる悪人に命を狙われておられ、昼間は家から出るのは危険だから、こっそりと夜武装して外出されるのだ。それで、来られた時刀を差しておられた。（七五・一一・二六　十五歳二ヵ月）

常日頃、勝自身は質素を旨としていたが、回りの者に施しをすることが好きであったようである。そしてクリスマスにはホイットニー家に必ず素晴らしい贈り物を届けさせた。

メリー・クリスマス!!

勝さん（海舟）の贈物は豪華なもので、届け方もすてきだった。四人の男がかつぐ担架にのせられて来たのである。封建時代の大名がお互いに贈物をする時は、こういう風にしたのだろうと思われる。美しくはないが、魅力的なあの緑の風呂敷に包まれてきた中身は、いろいろのみごとな贈物であった。（七七・一二・二四　十七歳三ヵ月）

勝は最初の援助だけでなく、窮地を見越してできうる限りの手当を惜しまなかった。

昨日父のところへ、知事さんから会いたいという書面が届いた。代理としてウィリィ[8]が出向いたところ、海軍卿勝安房殿から東京府に手紙が来て、勝氏が二年前に商法学校に寄付された六百ドルをホイットニー氏に提供するようにと書いてあったということであった。その上さらに楠本氏に対し、ホイットニー氏一家

は普通の外人とはちがうのであり、勝家の友人であるから、並の外人のように取り扱うことはまかりならん、と警告されていた。（七八・六・一五　十七歳九ヵ月）

とうとう一家のため、勝の敷地内に家を建てることになった。

木挽町の住み良い家を出たのは七月であって、森氏のご好意で、新しい家が見付かるまで永田町の彼の持家に住んでいる。友人達が一生懸命探して下さったがなかなか見付からなかった。それでご親切な勝安房様が私たちのためにお屋敷内に家を建てて下さることになって、ご令息の子鹿さんと富田さんの監督のもとに、今日から建て始められるのだ。私たちは感謝にたえない。何とかして感謝の気持ちを表したいと思う。（七八・一〇・一　十八歳一ヵ月）

同じ敷地内のことではあるし、勝一家の人々は入れ替わり立ち替わり、ホイットニー家を訪れるようになる。ただ感謝すべきご主人の顔を見ることはめったにない。

勝先生ご一家の方々は、とても親切にして下さって毎日必ず何回も訪ねて下さる。まだ勝先生にはお会いしていないが、お逸さんの話によると、お会いしないのは私たちではなく、ご家族も同様だということである。先生は訪ねてくる人には必ずお会いになるが、それ以外は書斎に閉じこもっておられるそうだ。しかし誰もが勝安房守の気高いご性格のことをほめている。（七八・一二・一〇　十八歳三ヵ月）

（五）　たみ夫人　日本の女

当初、日本の女の無知・無気・無力を嘆いていたクララではあったが、そうしたイメージを崩したのがこのたみ夫人との出会いであった。細やかな気配りと同時に多少のことではびくともしない不動の強さ。最初に出会った時、

勝さんの奥様（たみ夫人）は気持ちの良い老婦人で、眉毛をそり、歯を黒く染めていらっしゃった。（七六・二・九　十五歳五ヵ月）

父の失業という相継ぐ困難に遭遇し、

ご親切な奥様は「もしもほんとうにどうにもならない事態に万一なった時には、いつでも家に来て良いのだということを忘れないで下さい。そしてもしみんな留守をなさることがあって、アディをどうして良いか分からないような時には、家にお寄こしなさい。自分

の娘と同じように私がお世話しますよ」とおっしゃった。（七八・六・四　十七歳九ヵ月）

悲嘆に暮れるクララを前に、奥様は、世の中くよくよしても始まらない、万一の場合は家にいらっしゃいと説く。実際、よそにできた勝の子梅太郎を引き取り、育てているように、「自分の娘と同じように」ということができる女性であった。

勝先生の奥様という後見人があるのはほんとうに幸せだ。奥様が家来だか家老だか、とにかくお侍の出の人をよこして下さって、この人が召使いを雇ったり、暇を出したり、召使いの給料を支払ったり、台所や車夫の勘定を一切見張っていてくださる。私たちが留守の時は家を監視して下さるし、いつも丁重にお辞儀をし、丁寧なことばで話をする。奥様によると、外国人の家でなくても、日本人の家でもこのような役割をする人が絶対不可欠とのことである。（七九・一・六　十八歳四ヵ月）

家政を取り仕切る女丈夫。しっかり地に根を下ろし、まず家の中を固め、次に周囲へと目配りを怠らないのである。クララはこのたみ夫人を日本女性いや世界に通じる模範であると思った。

勝夫人は模範的な女性である。洗練された女性でしかも行届いた主婦である。それはご主人にとってありがたいことだ。ソロモン王が「価においてルビーにはるかにまさる」と言われたのは、このような女性のことにちがいない。（七九・一・一〇　同）

余裕のなせる技、夫人はホイットニー家の家政まで手中に収めている。

夫人は私どもの家のことは何でも知っていらっしゃる。というのは、話しているうちに急に「お宅はもう卵がございませんよ。田中にお金をお渡しになれば買ってきます」とおっしゃったのだ。私の責任なのだが自分では知らなかった。夫人は召使いがどこへ何をしに行くか全部知っておいでになる。（七九・一・一一　同）

クララの母は心労のためか、来日以来病気がちであった。暇を見ては彼女を見舞うたみ夫人。

昨日母は気分が悪くて一日寝ていた。晩に勝夫人が見舞に来て下さった。……夫人も若い頃は心配性であったが、年をとって世間の見聞も積んだので、何事も

最後にはうまくいくと思うようになり、余り心配しなくなったとのことだった。それはキリスト者のような考え方だ。（七九・二・二六　十八歳五ヵ月）

「何事も最後にはうまくいく」――このような運命に対するポジティヴな考え方はクララの共鳴するところであった。クララの母は今日も具合が悪い。弱気になっている彼女に寄り添い、

勝夫人は母を自分の子供のように、やさしくいたわられたので、本当にありがたかった。こんな遠い離れ島で、母の健康を案じている経験の浅い私達に、親切な友人を御与え下さった神は何と優しいことか。感謝とお詫びの言葉に送られて出られた勝夫人は、血のついた手を上げて「ほんとに血まみれの老婆ですよ。何か血なまぐさいことが必要なら、いつでもお呼びなさい」といわれた。（七九・四・二二　十八歳七ヵ月）

一家はアメリカへの一時帰国を終え、帰途父を亡くすという不幸に見舞われたが、二年半ぶりに、また日本に戻ってきた。

勝家では、私達がもとの家に戻ることを望んでおり、私達は今その家に洋間を増築している。勝さんの奥様は相変わらず快活で、二人の「おばあさん」と共共、こおろぎのように生き生きしておられる。（八二・一一・二五　二十一歳四ヵ月）

勝家のみんなが「こおろぎのように」元気で、しかも温かく迎えてくれた。

勝さんの奥様は母のために調理された魚を届けて下さった。ヤシキの人達は皆最高に親切だ。私達は家族の一員のように扱って頂いて感激している。実際勝家の二人の人は、私のことを姉様と呼び、母のことを母親のように思っている。（八三・二・二　二十二歳五ヵ月）

家族同様の扱いを受け、以前にもまして強い絆で結ばれている。そんな中、クララは最愛の母を癌で亡くすことになる。享年四十九歳であった。

神はわがいとしい、最愛の母をみもとにお召しになった。……勝さんの奥様は冷静だった。奥様のキリスト教への改宗を母が非常に望んでいたことや、キリストに捧げた母の生涯のことなどを私がお話すると、奥様は全部聴き終わってから、こうおっしゃった。「神の思召なのですよ、ですからあなたは悲しみに負けてはいけません。あなたの涙でお母様を生き返らすこと

は出来ません。お母様はもう何の苦痛もなく、今は幸せです。さあ元気を出して、お兄様や妹さんのためにお生きなさい。集会や学校の仕事をお続けなさい。そしてこの国で、あなたのお母様がなさっていた役を引き継いで下さい。悲しい時は私達のところへいらっしゃい。一緒に泣きましょう。そしてあなたが仕合わせな時は一緒に笑いましょう。さあ勇気をおだしなさい。そしてお母様をお手本になさい。これから先の長い年月のことは考えず、今日という日以外には日がないと思ってただ毎日をお過ごしなさい。」（八三・四・三〇　二十二歳七ヵ月）

「悲しいときは一緒に泣きましょう、仕合わせなときは一緒に笑いましょう」――なんと心に滲み通る励ましであろう。

勝さんの奥様は先日此処で長い間母の生涯について語り、母がはるばる二回も来日し、二回とも両家がお互いに近づき合っているのは不思議な御縁だとおっしゃった。又奥様はこうも語った。「お互いの愛情と尊敬の念はすばらしいことです。きっと、神様が私達には何だか分からないけれど、何かの目的のためにこうお命じになったのでしょう。」奥様は、母が今回はただ死ぬために来日したようなものだけれども、それでもなお、母の人生が、死が、そして日本へのみごとな献身が決して無駄ではなかった、と心から思っておいでになる。（八三・五・八　二十二歳八ヵ月）

ここに至って、クララ自身も母の死を冷静に受け止められるようになっている。たみ夫人は母を讃え、その死によっても、母がなお生き続けていることを教えた。

四　根をおろす

（一）　お逸　親友

勝家の人々との交わり、なかでも同い年の三女逸とは仲の良い姉妹のように付き合いを重ねることになる。その出会いで、

末のお嬢さんは本当にきれいで、十八歳（ママ）というが、とても若く見える。真っ黒な眼、しし鼻、半月型の眉、赤い唇、真珠のような歯、そしてばら色の丸顔に、お化粧をしていた。（七六・二・九　十五歳五ヵ月）

会う度に惹かれていく二人。

勝逸さんが五時に来て、九時までいたが、とても楽しかった。私と同じ年で、英語を習っている。二人で散歩に出て、かにを取りに海軍操練場のグラウンドに行った。帰るとベランダに上がって月を見たが、逸さんは私に腕を回して、「あなた好きよ」と言った。美人で活発な人である。（七六・七・五　十五歳十ヵ月）

クララは、日本の少女にはあまり見られない活発さを逸の中に発見して、ますます彼女に好感を持つようになる。

勝逸さんが今日十二時に来た。すばらしい着物を着て、唇を金色に塗り、顔にお化粧をしていた。昼食のあと二人でアイスクリームを作ったが、逸さんは大きなエプロンを掛けて手伝った。かわいい優しい少女で、私は同国人の友だちのように大好きだ。逸さんが英語をしゃべれるか、私が日本語をしゃべれるかしたらいいのに、とつくづく思う。でも二人は片言同士で何とかうまくやっているのだ。丸顔で日本人にしては大きい、いたずらっぽい黒い目をした美少女で、十六歳だが日本では若いレディなので、結婚の申し込みがたくさんある。でも結婚などしてはいけない！〈もし出来たら〉アメリカへ連れて帰りたい。近い中に泊まりに来ることになっているが、本当に大好きだ！（七六・八・二四　十五歳十一ヵ月）

逸といると楽しい。活発でいてしとやか。逸を通して日本の少女に対する見方も少しずつ変わっていく。日本ではもはや結婚適齢期にある逸。結婚を急がないでほしい。

会うごとに逸が好きになる。十七歳の少女としてはこの上なく楽しく、又淑やかである。もしお父さまが許して下されば、水曜日に泊まりに来ることになった。あの雄々しいサムライが誰も、逸と結婚しに現れることのないよう望むのみである。（七六・九・二八　十六歳）

日本の少女と交わるなかで、日本の女性が持っている優雅さに目が開かれる。何もしないように見えて、いつのまにか望むようになっている、優雅な身のこなし。

少女たちへの関心はますます高まってゆく。おやお様は優雅な若い婦人に成長していくし、お逸さんは友だちとして、全くすばらしい。今日、レッスンのあと、皆で坐って物語を語った。私は「美女と野獣」と「シンデレラ」を語り、お逸さんは「舌切り雀」と「悪童」

を日本語で話した。（七七・一・一二　十六歳四ヵ月）

お互い知っていることをぶつけ合って知るそれぞれの文化の独自性。お互い得意な面を披露して学び合う楽しさ。だがクララは狐やお化けの話だけは理解に苦しむのだった。

天気が悪いので、お逸はずっといて、夜も泊まって行った。ひどい風と雨が南からふきつけていた。台風かと思ったが、ただの彼岸のあらしだった。お逸はしょうが入りケーキとパンを作った。お父様が外国のもの、特にケーキとパンがとてもお好きだそうだ。二人で母の部屋の大きなベッドに一緒に寝た。夕方はゲームをして過ごし、十時に二階に上がったが、お逸は寝巻を持って来なかったので私の化粧着を着て寝た。日本の枕があったが、お逸は使わなかった。とてもいい人で大好きだが、大変悲しいことに異教徒で、狐の話だのお化けだのを信じ、雲の中に大きな竜がいて雨を降らせるのだなどと言う。（七七・三・二一　十六歳六ヵ月）

なにげない話に、日本の少女の心の内をかいま見る。折々に話す言葉にじっと耳を傾け、耳よりな話を仕入れては、せっせと彼女の「友」である日記に書き留めるのであった。

お逸と日本の習慣や言い伝えについて長い間面白い話をした。例えば、子供の歯が抜けるか、抜くかすると、それが下あごの歯ならば、新しい歯が上に向かって来るように、家の屋根の上に投げ上げ、上の歯ならば、新しい歯が下に向かって生えるように、家の下に埋めるという。お逸自身もそうしたと言った。……子供がからすの「カーカー」という鳴き声を真似すると、口からくちばしが生えるか、口の回りに角のようなものが出来てくると言われ、お逸はそれを見たことがあると言う。……枕の下に福祿寿つまり「七福人」の絵を置いて寝るとお金がたまる。これはお逸もやってみたそうだ。（七七・六・七　十六歳九ヵ月）

日本の風習や迷信は、クララにとって興味の尽きない話題であったが、それを素朴に信じている少女の存在は驚きでもあった。だが、クララは、こうした素朴な日本の少女に愛着を持つようになる。日毎に密着の度合いが深まっていく。

私たちは実のところほんの少しばかりお互いに嫉妬しているのだと思う。私たちはお互い相手にない魅力

があって、二人とも人の目を引くのが好きである〈当然のことながら〉。でも私は絶対ねたましいような様子は見せないつもりだ――私はお逸さんを心から愛しているし、彼女は私の生活にいく度も光を照らして下さったのだ。（七八・九・二七　十八歳）

だが悲しいことに帰国の話がもちあがった。兄ウィリィをアメリカで勉強させるのだという。

帰りみち、お逸と帰国の話をしたら、とても悲しそうにしていた。……ジョナサンとダビデのように固く結ばれたお逸とどうして離れられよう。来日以来知り合いになり、愛するようになった人達がみんな急に、私達の生活にかかわりがなくなってしまうなんて！なんと悲しいことだろう。（七九・一二・九　十九歳三ヵ月）

とうとうお別れの日が近づいた。

お逸ともお別れをしたが、涙にむせて殆ど物も言えないので彼女を抱くようにして、「さようなら、最愛の友よ、神の祝福がありますように」とだけ言った。お逸も目に一杯涙を浮かべて私にキスをし「ああクララさん、これが最後なのかしら」というと、こたつに顔をうずめてしまった。私は悲しさのあまり彼女をそのままにして飛び出してしまった。再び彼女に会うことがあるのだろうか？　（八〇・一・二四　十九歳四ヵ月）

アメリカに帰国しているうちに、逸は結婚をした。楽しかったクララとの娘時代に終止符を打って。再会した日、

逸さんは新しいいろいろの心遣いのために奥様らしく、しとやかになったが、昔と同じ愉快な娘である。先日彼女は私達に会いに赤ちゃんのリヨ（長女、理代子）をつれて来た。（八二・一一・二五　二十二歳二ヵ月）

母たみ夫人から娘逸へ引き継がれた、日本の女特有の、しとやかなしぐさに秘められた強さは、やがてその娘リヨにも継承されることだろう。

（二）母娘　依存―独立

母が私に家政の「鍵とエプロン」をまかせたので何かと忙しい。ほとんど何もないところから、どのようにすばらしい夕食を準備出来るか、ということはとても面白い。（七五・八・二一　十四歳十一ヵ月）

日本での生活を機にクララは家事の采配をまかされる。

料理は大好きで、日本にある物を工夫して、故郷の味を試したり、西洋野菜の開発を手掛けている津田農園や開拓使に出向いて材料を求め、日本人の口に合う西洋料理、もてなし料理、お菓子づくりに励んでいる。好評につき、講習会を催したり、これが高じて、後に料理ブックを出すまでになる。母はクララの勉強仲間であり、よき理解者でもある。

又母と勉強を始めた。ラバートンの『歴史概要』を読むことにしたが、とても面白い。それから綴字法と習字も習っている。色々の方面で私の教育に時間をさいてくれるなんて、何ていい優しい母なのだろう。こんなに大事にしてもらい、余り幸せすぎるとだめな人間になってしまうのではないかしら。（七六・六・一三　十五歳九ヵ月）

教わる人のいない国に来て、母娘の絆は、ともに学ぶことを通じて以前よりも強くなった。でも、こちらに来て、床に伏すことが多くなった母。とても心配だ。

今日の午後、母が病気になった（七六・一〇・三　十六歳一ヵ月）

なかなか回復の兆しが見られないので、あのヘボン先生を訪ねる。

ああ、私の心はとても重かった。母が生きようと死のうとどうでもいい、というのかしら。ヘップバン夫人はお母様がいらっしゃらないので、私がどんなに母のことを心配しているのかおわかりにならないのだ。私は処方箋をいただいて、相変らず重い心を抱いて家に帰った。……帰宅すると、午後中ずっと母と客の相手をしていた。……母はすっかり疲れてしまい、いらいらして、人の話し声も我慢が出来ない位で、しばらく泣いていた。（七六・一〇・五　同）

母の体の不調に加え、ホイットニー家の前途は多難である。

今日は憂鬱な日だった。昨夜はお母さんの足元に坐って、お母さんの膝に頭をつけて思いきり泣いた。お母さんのやさしい手を頭に感じながら。こういう姿勢で泣くのは気持が良い。私は本気で泣いてはいたが、一方では泣くことを楽しんでいたのだ。お母さんはご自分の悩みがいっぱいあるのに、一生懸命私を慰めて下さった。私の悲しみはその時だけのものだが、お母さんのは一生続くものなのだ。私はお母さんの悲しみ

を増すようなことをしてはならない。（七八・一・三　十七歳四ヵ月）

経済的不安を抱き、将来を案じる母を前にして、クララは母の支えになりたいと思うのだった。苦労続きの母にふりかかった更なる苦悩。父親の解雇の知らせ。

今日という日は、わが家の人々にもたらされた悲しみと、悩みの末に永久に忘れられない日となるであろう。父は、我々の敵である矢野（次郎）の仕業で、東京府から免職になったのだ。父は六月一日をもって、この学校を去らなければならない。故国に帰っても、父は実業とは縁が完全に切れているし、年齢の関係で新しい職場を見付けることはできない。それのみならず、帰国する旅費さえない。いかんともし難い状態である。（七八・五・二九　十七歳八ヵ月）

六月一日は父の失職する日だ。母の歎きは見ていられない。――それは記憶しておくだけで、記録に留めるべきではない。（七八・六・一　十七歳九ヵ月）

父に言わせれば、

父は母と知り合って以来、いつも困難に出会っているらしい。そして不思議にも父の味方になってくれる人はいつもいないのだ。（七八・六・一　同）

気の毒な父親。妻からも娘からも理解されずに来たのだ。父はクララの日記にもほとんど登場することはなかった。希薄な存在。

父の失業以来、将来の不安から母は鬱ぐことが多かった。

母はまだ起き上がれないので、加賀屋敷（本郷）からベルツ先生に来ていただいた。二、三質問されたあと、蛭を処方されたので震え上がった。まだ見たこともないそんなものを、とても使う気にはなれなかったが、母がどうしてもと言うので、先生は五十匹とおっしゃったが、二十匹だけ田中に買ってこさせた。……気味の悪いひるが母の白い肌にとりついて、血が細く流れるのを見て、気が遠くなりそうになったが、初めてのことで、びくついている母をはげますため、おしゃべりを続けた。（七九・四・二二　十八歳七ヵ月）

近代医学普及のためお雇い教師として招聘されたばかりのベルツ先生。『ベルツの日記』にはこの記録は残されていないが、近代的と思いきや、ひるの処方とは。だがこの治療が効を奏したのか、女学校教師の仕事を得て気持ちに張りが出てきたのか、母は元の元気を取り戻した。

今日は中村氏[9]の同人社女学校が、平河町達磨坂に開校する記念すべき日である。母はここで教えるようにたのまれた。今朝九時に行き、十二時から宴会で二時までいた。二十名位の生徒が集まったほか、皇后様の学校から女の先生、師範学校の卒業生数名、津田、柴田、中村、勝諸氏とその家族に私達というやや雑多な集まりだった。中村先生がまず挨拶をした。……またここでホイットニー夫人をご紹介いたしたいと思います。夫人は教養があるばかりでなく、聖書を深く信じ実行なさっておられる、まことに教師としてふさわしい方であられます。聖書こそ若人のしるべであり、夫人は自分のためばかりではなく、あなた方のために教鞭をとられるのでありますから、心して授業を受けてほしいと思います。（七九・五・一　十八歳八ヵ月）

母アンナは教師の道に意欲を燃やした。だが父の仕事はいっこうに見つからない。そこで父は一足先に帰米することになった。追って家族も帰国する。一八八二年八月、再来日の帰路、父は病気で死亡する。そして再び訪れた日本で、母は病床に伏すことが多かった。

（三）母の死　孤独

神はわがいとしい、最愛の母をみもとにお召しになった。つらい何週間もの間、ずっと私達は希望と恐怖のうちに、母を看守って来た。……母が私にとってどのような存在であったか、誰も知らない。母は私達二人は一体だとよく言っておられた。私がご自分の一部であると感じていらした。どんなにか私は母を愛し、母は私を愛しておられたことか！　……彼女は四十九歳……激痛の発作が続き、その間中、母の叫びは胸もはりさけんばかりであった。母がもう生きられないなら、母を楽にして下さるよう私も祈った。……私達は、母が生前好んで訪れた青山に、安息の場所をさがしに出かけた。……私達は母の意志に従って、母の愛していた日本人の間に、彼女を置くことが一番よいと思った。日本の人達はこのことをとても喜んだ。母がそこに埋葬される最初の外国人であり、日本人の間に埋葬されるのは母にとっても英雄的であると彼等は言った。そしてこれは母の願いでもあった。（八三・四・三〇　二十二歳七ヵ月）

最愛の母を亡くし、クララは一人で来し方行く末を考えるのであった。思えば、文学を志し、努力を重ねたこともあった。今その成果を目前にして、一緒に喜んでくれる人がいないのだ。なんと張り合いのないことだろう。

私は最近一人ぼっちでいることが多いので、考えたり計画を立てたり、する時間が充分にある。私は昨夜兄とたのしい語らいをした。兄は神の国にふさわしい善良な人のように思える。彼は最近大統領からアメリカ領事館の通訳に任命された。……私は、私が初めて書いた本『アグネス・セント・クレア』を一部受け取った。然しこれを喜び、又見ることを望んでいた人がもうこの世にいないので私は余り嬉しいとは思わなかった。（八三・五・一六　二十二歳八ヵ月）

あれから一年が立ち、クララは日本に眠る母とともに、母の意志を継ぎ、日本の地に根をおろすことが一番自然なことのように思うようになった。

丁度一年。信じられない。その間私は母なしで生きて来た。それでいて私はここにいる。……

私はもう一度総てを思い返している。ここ三日三晩、私はただ母の事のみを考え夢を見た。私の大切な大切な美しいお母様。母に会いたいと思う心は別離の時間が長くなればなるだけ強くなって行く。おお神様、あなたの大きなお恵みで、私が母に会うにふさわしい人になるまで私を死なせないで下さい。神よ、私のあわれな魂をお救い下さい。（八四・四・一七　二十三歳七ヵ月）

（四）梅太郎　結婚

「あの人の奥さんは英国人ですよ」……どんな事情があって何もかもあまりにも異なるこの二つの国の人々が結婚したのか、……アングロ・サクソン民族の一員が、モンゴル人とそんな親しい関係になるなんて、胸がむかつくことだった。（七五・一二・一七　十五歳三ヵ月）

日本に来て間もない頃、こう日記に書き留めたクララであったが、八年後には勝家の三男梅太郎と結婚することになる。出会いは、勝家での聖書の授業でのことである。クララは十六歳の先生、梅太郎は十二歳でその生徒である。

午後、ウィリィがまだ帰って来ないので、私はアディを連れて勝家に聖書の授業に行った。みんなの正規

のレッスンをみてあげ、賛美歌と、戒律を一つ新しく教えた。賛美歌を二度歌い、お祈りをしてから、聖書を読んだ。終わるまで一時間半もかかったが、私達が行ったのを皆喜んで下さったようだった。生徒は、お逸、おこまつ、梅太郎（三男、後クララと結婚）、七郎（四男、義徴）、滝村さんの弟の小松で、とても面白いクラスだった。日本語を正確に話すことが出来さえすればいいのにと思う。梅太郎と七郎は一緒に坐っていたが、梅太郎が聡明なのに七郎は明らかに愚鈍だ。（七六・一〇・二二　十六歳一ヵ月）

聡明だが、いたずら小僧の梅太郎。

ところで、若い男の子は本当に仕様がない。梅太郎は今夜泊まって行ったが、この子はいたずらばかりしていた。〈私の魔術師〉（七七・五・二二　十六歳八ヵ月）

いたずらには手を焼くが、一緒にいると楽しい。

梅太郎は四日泊まって行ったが、我が家に彼がいるととても楽しいということがわかった。（七七・九・四　十七歳）

子どもだと思っていた梅太郎もいつのまにか見違えるような青年に成長していった。

朝食とお祈りをすませてから勝さんの家に新年のご挨拶に出かけた……間もなく梅太郎さんが、つるつるに磨いたお顔に、五つの紋を染め抜いた灰色と黒の着物を何枚か着て、その上に茶色の袴をきりっとつけ、真新しい下駄を履き、手袋をはめて父上の家から出て来られたが、すっかり一人前の紳士のようであった。（七九・元旦　十八歳四ヵ月）

工学寮を目指している梅太郎だが、なかなか勉強が手に付かない。

梅太郎さんは工学寮には入りたいのにひどく怠け者だ。もともと頭は良いが、怠けるので思うように進歩しない。（七九・一・一六　同）

梅太郎には悩みがあった。自分はたみ夫人の子どもではなく、長崎で病没した梶くまの子であるという。

今朝、梅太郎が私に自分の身の上について打ち明けたが、特にこんな若い少年がこんなことを知っているかと思うと、私はショックを受けた。……追々わかったことは、梅太郎の実母（梶くま、一八六六年一月没、二十五歳）は肥前の、よくできた美しい婦人だったが、三歳の時死別しその後、東京に送られて育てられ……

こういうことは考えただけでショックだ。天皇陛下まで奨励しておられるが、こんなやり方は帝国の土台をくずすものなのに！　梅太郎は、ひどく赤裸々に話しはしたが、父（勝海舟）の行動を少し恥じているのを見て、私はうれしかった。（七九・五・二九　十八歳八ヵ月）

梅太郎が、その実母のゆかりの地長崎に旅立つ。

梅太郎は今日長崎に出発し、二、三ヵ月滞在するつもりだ。彼がいなくなって、私達はみな残念がっている。（七九・六・二一　十八歳九ヵ月）

帰国して、再び日本に戻ってきた時、

日本の友人達は、私達が着いたことに熱狂していてくれるので何だか故郷にもどって来たような気がする。

しかし、もっともうれしいのは梅太郎の変わりようである。祝福あれ、若者。彼は十九歳の大柄な若人に成長し、控え目な落着いた物腰であるが、何よりすばらしいのは、すっかり心が変わったことである。彼は全く信心深いクリスチャンになり、いろいろの場合にそのことが示されている。（八二・一一・二五　二十二歳二ヵ月）

梅太郎はクリスチャンになり、キリスト者の道に進むつもりである。

今日は私の婦人祈禱会をはじめる日である。梅太郎は横須賀か神奈川へ造船の勉強に送られるはずのところあやうく逃れて、遂に牧師になる勉強をすることを許された。彼の父上は彼を上野の近くの木村氏（熊二、明治女学校の創設者）へつかわされ、彼は大いに満足している。母が逝ってから梅太郎は随分変わった。少年から大人へと成長し、ますます真面目になり、私は彼がこのまま導かれ、日本人の幸福のために力になるよう祈っている。（八三・六・二　二十二歳九ヵ月）

クララの母が亡くなってから、梅太郎はその意志を継ぐかのように、牧師を目指して勉強を始めた。そして母の意志を継ぐことはクララ自身の希望でもあった。一八八六年五月、クララは二十五歳で梅太郎と結婚する。

結婚のいきさつについては、残念ながら日記に残されていない。『海舟日記』によると、次のようにある。[10]

明治十九年五月三日　晴

クララ、梅太郎と婚礼、来ル八日ニ立結び候旨返答こ

れある由。且、同所へクララ、暫滞在致さす段なり。

一八八四年一一月一二日から、結婚、出産とめまぐるしく忙しかったせいか、クララは日記をつけていない。あるいは紛失したのかもしれない。最後の日記は一八八七年四月一七日のもので、

今日は最愛の母の命日である。私たちが彼女を視界の外に葬ってから四年目である。朝早くお墓に花を飾るため青山墓地に出かけた。これが今私が母にしてあげられるただ一つのことなのだ。私の心と手は母のために何か別のことをしてあげたくてうずいているのであるが、ああ、母は今は、私の心づかいと愛がどんなに強くても、それらの届かぬ所へ行ってしまった。……

この年月は何と長く、又変化に富んだものであったことか。今日は私一人で行ったのでなくて、可愛いウォルター坊やをつれて行った。この子は梅太郎と私の息子で、生後六ヵ月になる。私はとても自分が変わったように感じた。……

私自身が母になったので、一層母の気持を感じることが出来る。そして母の言った多くのことを今思い出し、多少共感を持ち、そしてそれは新しい意味をもって私に迫る。私の母性が私を一層母に近づける。どうぞ私も母と同じ位よい母親になれますように。そして私の亡きあと同じように惜しまれますように、神様のお助けを祈ります。（二十六歳七ヵ月）

この結婚は、一男五女、六人の子どもをもうけながらも、海舟の死をもって破綻する。伝道の道と経済生活の両立が難しかったのであろうか。子どもの将来を考え、クララは離婚し、帰国の道を選択する。一九〇〇年五月、三十九歳の時のことであった。

むすび

明治初期、日本へやって来たアメリカの少女クララが、異文化の中でどのようにアイデンティティを形成し、日本の地に根をおろしていったのかを、その日記に追ってみた。「素材に語らしめる」試みといってもよい。

クララの場合、日本に来る前から青年期はすでに始まっていた。祖国でどのような生活を送っていたかはさだかでないが、母親の庇護のもと、信仰を求め、芸術を嗜み、読

書による自己啓発を心がけていたようである。日記をつけ、自分を見つめ、自己を模索する習慣もすでに築かれていた。その際自己陶酔する傾向があったことも否めないが。

世紀末のオリエンタリズムの潮流を背景に、母の「大君の都」への伝道の志が、娘にも日本への憧憬を抱かせた。期待に満ちた新天地日本。たしかに風物は素晴らしかった。だが目前に現れた裸の人々、それは「堕落」を思わせた。欧化のうねりの中で、中途半端なミックス・カルチャーも随所で経験した。

お寺はすっかり変容している——床にはベルギー産の絨毯が敷いてあり、華麗な衣をまとった僧侶は、若い陽気な人ばかりで椅子に腰かけている。そして、ああ、なんということ、神道の神聖な鏡の代わりに外国製の洗面用の鏡がかかっている。おどろくべき変革である。(七七・一一・一九)

茶番である。かの福沢諭吉も洋服を脱ぎ捨てたではないか。クララは思う。日本は日本的であるからこそ日本なのだと。

違和感、戸惑い、行き違い、様々な葛藤を体験しながら、日々深まりゆく日本人との交わりは、土地に根づく文化の深さに目を開かせた。

「無知・無気・無力」と見えた日本の少女たちに、「つつましさ」、「淑やかさ」、「優雅」を見出し、さらには、その奥に秘めたたくましさを感じることもできた。

どっしりと土深く根を張り、生活を見据えるたみ夫人のたくましさのなかに、クララは西欧の女性にまさるとも劣らぬ強さを知る。親友逸の淑やかさのなかに洗練された美しさを見る。限定された条件の中で、収斂しながら洗練されていく日本女性。

異文化を異文化として確認し、尊重する地平において初めて人間的共鳴が成立する。固有を極めることは普遍に通じる。

やがて、逸との一心同体とも思える生活体験を経て、クララはアメリカ人でありながら、「日本人らしい」しぐさを学習する。海舟曰く、「すっかり日本人におなりですな。」

伝道を志した母の死後、同じ抱負を抱く梅太郎とともに、日本の土に眠る母の意志を引き継ぐ。こうしてクララは日本の地に根をおろし始めたのである。

〔註〕

本稿のクララの日記からの引用は、クララ・ホイットニー　一又民子訳『クララの明治日記』上・下　講談社一九七六年 "CLARA'S DIARY" KODANNSHA INTERNATIONAL 1979 によった。また、クララについて書かれたものに一又正雄「青い目の嫁が見た勝海舟」文藝春秋一九七四年一〇月号がある。

(1) 森有礼（一八四七―一八八九）
薩摩藩士　一八六五年藩命によりイギリス留学。ロシアを経て、六七年アメリカに渡り、ハリス教団に入る。一八七〇年アメリカに駐在、七三年外務大丞、清国公使、外務大輔などを歴任。明六社を結成、啓蒙活動を行う。七九年イギリス公使、八五年初代文部大臣。

(2) 『森有礼全集』第一巻一〇九頁

(3) WILLIAM COGSWELL WHITNEY（一八二五―一八八二）
エール大学卒業後、実業学校を設立、経営。森有礼との契約により、一八七五年商法講習所の所長を予定して来日。果たされず、七八年まで簿記教授を務めた。商法講習所は後の一橋大学の前身である。

(4) 勝海舟（一八二三―一八九九）安房
貧しい旗本勝小吉の長男。剣術、蘭学を究め、後にオランダ海軍の学術を学んだ。一八六〇年には、咸臨丸を指揮して、米国を訪問。幕府海軍の育成を図るとともに、維新政局の収拾に尽くした。新政府では海軍大輔等に任ぜられたが、七五年以降野に下り、著述に努めた。

(5) 富田鉄之助（一八三五―一九一六）
勝海舟の塾で、蘭学、航海術、砲術を学び、一八六七年アメリカに渡り、六八年帰国。ニューヨーク総領事、八八年日本銀行総裁となる。

(6) 福沢諭吉（一八三四―一九〇一）
中津藩士　蘭学を修め、適塾に入門。藩邸中屋敷で蘭学を教える。これが慶応義塾の起源となる。一八六〇年、咸臨丸で渡米、さらに、六二年幕府派遣の遣欧使節に随行、六六年『西洋事情』を出版、開化に大きな影響を与えた。

(7) 津田仙（一八三七―一九〇七）
佐倉藩士小島氏の二男、後に津田氏を嗣ぐ。蘭学を学び、福沢諭吉らとアメリカに渡航、農事に目が開かれ、帰国の後は農事改良とその普及に努める。一八七五年学農社を設立、翌年農学校を開き、『農業雑誌』を発刊、かたわら津田縄等の発明をするなど、農業の近代化に貢献した。キリスト者であり、女子教育、盲唖教育、禁酒禁煙運動にも尽力した。

(8) WILLIS NORTON WHITNEY（一八五五―一九一八）
電気工学を修め金沢師範で教えたが、医療と伝道を志し、東京医学校に入るが中退し、家族とともに帰国。ペンシルバニア大学に編入し、眼科学を修め、八一年卒業。父母に寄せられた香典を基に、赤坂病院を設立、地域の医療に尽くした。

(9) 中村正直（一八三二―一八九一）敬宇
幕臣。漢学、蘭学を学び、一八五五年昌平坂学問所教授、六六年幕府の遣英留学生取締として渡英。『西国立志編』を翻訳。七三年私塾同人社を設立、明六社に参加。七四年受洗。

(10) 勝海舟全集21「海舟日記」一六六頁